東京都立成瀬高等学校図書委員会広報誌「木馬」No.102(平成30年11月1日発行)より抜粋

作家訪問

井上真偽先生

執筆について

Q1お話の中に出てくる事件はどのような時に思いつくのですか？　また、何かを参考にすることはありますか？

A　事件は書き始めてから考えます。『探偵が早すぎる』に出てくるようなマインドマップを書きます。ネタ帳は一応持っていますが、書いたものを次の日に見た時に「なにこれ？」となってしまうのであまり使えません。

Q2登場人物にモデルはいますか？

A　いません。私の作品にはマンガっぽいキャラクターが多く出てくるのですが、それはマンガから着想しているからです。

Q3本を書く際に気をつけていることはありますか？

A　読後感を意識しています。書き始めは結末をあまり考えず、勢いで書きます。読者が「こういうことだったのか！」と思えるようにしています。あとは健康にも気を付けています。

Q4作品に文学史や拷問についての描写がありましたが、元から知識がありそれを使って書きたいと思ったのか、それとも作品に取り入れたいと思って学んだのか、どちらですか？（特に拷問知識）

A　後から調べるので元々知っている訳ではないです。図書館で何冊も借りてきて、そのうちの一冊を読み込みます。『世界拷問史』を参考にしました。

Q5タイトルはどのように考えているのですか？

A　完成してからつけます。内容が伝わりやすくキャッチーなものを自分で考えます。

Q6一冊の本を書くにはどのくらいの時間がかかりますか？

A　半年以上です。トリックが無ければもう少し早く書けると思います。書き終わった後に伏線を張ります。

Q7もし、今後、ミステリとは全く別のジャンルの作品を書くとしたら、どのようなものを書いてみたいですか？

A　阿部智里さん、上橋菜穂子さんのような、ファンタジーを書いてみたいです。昔はむしろミステリ以外ばかりで、デビュー作が初ミステリでした。

Q8小説はどこで書いていますか？

A　第一稿は外で、第二稿からは家で書きます。外で書く時は、カフェに行きます。

Q9どんな媒体で書いていますか？（好きなペンとか聞きたい）

A　ノートパソコンです。画面を外してタブレットになるもので、Word を使います。音声入力の機能を使用することもあり、腕が腱鞘炎になる心配がいらず便利です。(注・音声入力は我々には馴染みがあり、それを聞いた時反応が大きかったのだが、井上さんが同世代に話しても反応が薄いそうである。)

Q10執筆中の息抜きはありますか？

A　スパ、スーパー銭湯、温泉、サウナ、海外ドラマ、深夜アニメなどです。最近は「はたらく細胞」を見ています。

ドラマについて

Q11ドラマの原作者となる場合、どのくらいそのドラマに関与するのですか？

A　ケースバイケースで、作家本人がどれだけかかわりたいかによると思います。私は他の本の執筆があったのでお任せしました。

Q12ドラマ化する際には、脇役やロケ地などを決めたりできますか？

A　先程の質問の様に関わっていません。ドラマを見ていて、役者さんの頑張りがすごいと思っています。

Q13ドラマ化にあたって、これだけはしてほしくない、ということはありますか？

A　視聴者を無視することです。視聴者を大切にし、面白くやってほしいです。

作家という仕事について

Q14作家を志すようになったのはいつ頃からですか？

A　中学時代からです。哲学的なやばいやつを当時は書いていました。あとはマンガを描いていました。高校時代から小説に移りました。自分の世界が伝えられるのであれば媒体は問わず、頭の中のものを形にしたくて今は小説を書いています。

Q15小説家志望での大学の進路はどのようにして決めましたか？

A　大学は小説と関係ありません。クリエイターになりたいと思っていました。小説を書くのであれば、日常生活は小説と関係ないことをすると良いです。小説を書くには経験や気持ちが大事です。

Q16作家を仕事とするまでに、別の職業に就いたことはありますか？

A　証券系のシステム会社に勤めていました。今は専業作家をしています。

Q17作家という仕事は、小説を書く以外にどのような仕事をオファーされるのですか？

A　講演会、インタビュー、取材、アニメの脚本など広がりがあります。何かを「作りたい」という気持ちがあれば何でもできます。

ご自身について

Q18言語学（中国語、ロシア語）を学んでいたのですか？

A　学んでいたのではなく、キャラに合わせたセリフをネットで翻訳しています。大学時代はドイツ語を学んでいました。

Q19高校時代の一番の思い出は何ですか？

A　特に思い出は……（笑）。当時はマンガを描いたりしていて夜が遅く、授業中はよく寝ていました。授業を受ける意味がわからず、基本的に教科書に書いてあることを、なんでわざわざ人から聞かないといけないんだと思っていました。大人になったらわかりました。

Q20高校時代の部活動は？

A　剣道部と文芸部をかけもちしていました。文化祭の時だけ活動する劇団にも入っていました。

Q21文系ですか、理系ですか？

A　理系ですが、どの教科もまんべんなく興味はありました。

Q22先生は『その可能性はすでに考えた』に出てくる「奇蹟」はあると思いますか？

A　あると思いたいです。重力も目に見えない魔法のようなものなので、あってもおかしくないです。

Q23上芦丞（注・『その可能性はすでに考えた』シリーズの名探偵）の推理方法が背理法みたいだと思ったのですが、先生は学生時代に数学が得意でしたか？

A　数学的な考え方は好きです。数式など客観的に示せるものは、誰が見ても同じ結論になるので良いと思います。

Q24どんな高校生でしたか？

A　↓19に同じ。

Q25高校の頃によく読んだ本はどんな本ですか？ また、今読むのはどんな本ですか？

A　高校生の頃は哲学、犯罪心理の本や「ユリイカ」という雑誌など、とにかく手当たり次第に読んでいましたが、今は流行りの本をできるかぎり読むようにしています。そうすると世間と自分の感覚のずれがわかり、また、自分の「読めるもの」と「読めないもの」がはっきりしてきます。

Q26他の作家さんで好きな作品はありますか？

A　高田大介さんの『図書館の魔女』、『指輪物語』（J・R・R・トールキン）、『ストームブリンガー』（マイケル・ムアコック）です。『指輪物語』は、友だちと本にあった架空の言語を研究したりしていました。

Q27高校生のうちにやっておいた方が良いことなどアドバイスをいただけますか？

A　恋愛や、とにかく好きなことをやるといいと思います！　高校よりもあとの人生の方が長いので、今そんなに楽しくなくても、イケてなくても大丈夫ですよ。

※井上真偽さんに逆に質問されたこと
①今、高校生の中で流行っているものは何？
②ほしいものは？
③どんな本が読みたいと思う？
④ＳＮＳはどのくらい使っている？
⑤将来の夢は？

（記録まとめ　２年Ｋ　＆　２年Ｈ）

【感想】

◆今回の作家訪問は私にとって二回目でした。前回は読書班から司会として参加しましたが、今回は広報班から記録係としての参加で記事を書くことの大変さを知りました。当日、司書の池田先生がいないという厳しい状況の中、私は井上さんのお迎えを任されました。どんな方がいらっしゃるのかわからず、そわそわしていました。井上さんとお会いした時、話しやすい方でとても安心しました。そういったドキドキを味わえるのも作家訪問の魅力の一つだと思います。

最後にこの作家訪問の企画に携わって下さった皆さん、本当にありがとうございました。今回の貴重な経験をこれからの図書委員としての活動や、人生に活かしていきたいです。（２年Ｈ）

◆今回、訪問させていただいたのはドラマ「探偵が早すぎる」の原作者である井上真偽先生です。真偽先生は性別不明、年齢不明のいわゆる覆面作家でありまして、まさか訪問を了承していただけるとは、と図書委員会一同驚きました。真偽先生は東大出身のミステリ作家であり難解な内容の著書もあったようで本を読み慣れている委員達も「難しかったな」と感想を述べていました。（しかし『探偵が早すぎる』は難解な内容というわけではないのでぜひ読んでいただきたいところです。ドラマとは設定が異なっている部分があり、比較しながら読むとより面白いと思います。）

作家訪問中一番印象に残っている話をピックアップしたいと思います。それは作家になった理由です。学生時代に頭の中に描いたストーリーを目に見える形にしたかったからだそうです。実は先生はミステリ作家になりたくてなったわけではないらしいです。本当はファンタジー系を好んでいらっしゃるようでチャンスがあればファンタジー系を書きたいのだそうです。ミステリ・ファンタジーとは面白そうだと思いませんか？ そのチャンスが来て

我々がその本を手に取れる日が来ることをファンタジー系大好き人間として祈っています。

図書委員会ってどうもオタクが多いのです(良い意味で)。真偽先生も少しそういう一面(東大出身だからでしょうか？ 東大出身ってそういうイメージがあります)がある感じがしました。ですから凄く話しやすく沢山の話を聞けましてこちらとしては大満足でした。真偽先生も楽しんでくれたようでした。

この度は初の司会を務め、緊張のあまり少々馴れ馴れしい態度を取ってしまったかなとも思いましたが、後で並んでサインをいただいた時、「(話せて)よかった」と声をかけていただきまして本当に嬉しかったです。また何処かでお会いできたらなと思います。

（3年ＡＫ）

◆作家訪問に参加して、実際の作家さんの仕事について知ることができて、良かったです。作家さんがどうやって本を書いているかがわかり、また、一冊の作品ができるまでに多くの時間が費やされていることがわかりました。普段聞くことのできないお話を聞けて、とても貴重な時間を過ごすことができました。サインまでもらえてとてもうれしかったです。

（1年Ｓ）

◆今回の井上先生へのインタビューは私にとって三度目の作家訪問。毎度毎度「人生で一度あるかどうかの機会だ」と言われ続け早三年。一体私は前世でどんな徳を積んできたのだろうか・・・気になる所だ。さて、まず作家訪問が決まった当初、先生についての予備知識がない中、著書を購入し読んだ所、一度すぐに本を閉じてしまった。書き出しが中国語だったのだ。その先も複雑な言葉遣いや膨大な知識に圧倒され、こんな小説を書くのはおそらく思考スピードが早く、気難しい人なのだと勝手に思い、身構えてしまった。しかし、いざ先生と会ってみると、温厚そうな方で、私の拙い質問にも雑談を交えつつ真摯に答えて下さった。

高校時代は授業中によく寝ていたという話や、私たちのからの質問とは別に好きな有名人やアーティストの話では私たちの世代の友人に居てもおかしくないくらい身近な存在に感じられた。

私たちは半年後、成瀬高校を卒業する。進学したら私にはこんな貴重な機会はもう訪れないかもしれないが、後輩には作家さんのこともインタビューのことも学べるこの行事を永く続くよう努め、人生の糧にしていってほしい。

（3年ＴＭａ）

◆今回の作家訪問では井上真偽先生が来てくださいました。私は今回が初めての作家訪問で、以前に作家さんとお会いするというような機会もなかったので、少し不安でした。それに私が事前に読んだ作品は、おもしろ味がありつつもホラーのような怖い描写もあったので、どんな方なんだろうという緊張もありました。しかし、実際にお会いしてみるととても気さくにいろいろと話してくださる方でした。私たちからの質問にも親切に答えてくださって、初対面の人相手ではまともに会話できないような私でもお話を楽しむことができました。作家というお仕事の裏話だとか、私たちへのアドバイスなど貴重なお話をたくさん聞くことができて、今回の作家訪問に参加できて良かったと思いました。

（3年ＡＨ）

◆私は今回の作家訪問に参加する前は「作家さんは堅苦しくて気難しいのではないか」という先入観を持っていました。しかし、いざ話をお聞きすると、話しやすくて面白い方で、作家という自分とはかけ離れた存在がとても身近に感じました。私は事前に井上先生が執筆された『その可能性はすでに考えた』という本を読んだのですが、一つの事件を様々な視点で考え、一見不可能な考察をするところがとても面白いと思いました。また、私はこの物語のキーワードである「奇蹟」を一つの事件の解決方法にしていいのだろうか？と疑問に思っていましたが、「奇蹟を自分の手で起こして神のいたずらのように見せかけた」という考察を読んで、人間が人間の限界に挑戦していく可能性のようなものを感じました。

今回の作家訪問では、こういったことを直接作家さんにお伝えすることができてとてもうれしかったです。制作の裏話など、読者には興味深いお話も聞かせて頂き、さらにこの物語に対する考えが深まりました。貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございました。

（2年Ｋ）

◆今回の作家訪問は井上真偽先生に取材させていただきました。井上先生には暑い中、成瀬高校においでいただき、お話をうかがいました。

まず初めに自己紹介と、各々読んできた井上先生の作品について感想を言い合いました。私は『探偵が早すぎる』と『その可能性はすでに考えた』の２シリーズとも読みました。やはり私が感じたようにみんなも『その可能性は～』シリーズをかなり難しく感じたようです。両シリーズとも探偵が登場するものの、雰囲気が全く違うし、言葉の言い回しやトリックの難しさも段違いで、『探偵が～』から読み始めた私はかなり苦しみました。参加してくださった先生たちは『探偵が～』を読んできた方が多く、少し意外でした。井上さんは私たちの感想を聞いて『探偵が～』から読んだ人は苦しみますね、私でも難しいと思います、などとおっしゃっていて少し面白かったです。

次に私たちの側からたくさん質問させていただきました。執筆に関するこ

とから井上先生の高校時代のことまで幅広い質問をさせていただきました。私が特に驚いたのは高校時代理系でいらっしゃったことです。私の勝手な想像で作家さんは文系であるものだと思っていました。もっとも、井上先生の場合は「文系科目が苦手だから理系」という感じではありませんでした。理系的な発想から出るからこそ、私が今まで見たことのないレポートのような様式だったり、「可能性を否定していく」という推理方法だったりするのだろうと感じました。

今回、井上先生にお会いする際、東大卒の方ってどんな方なのだろうか、話が難しかったりしないだろうか、など変な気負いをしてしまっていたのですが、どうやらそんなことはなく、気さくでとてもお話ししやすかったです。一方、井上さんも私たちの趣味や流行りなど興味があるようで、たくさん聞いて下さりました。その時間は私も「もっともっと話していたい」と思う時間でしたし、井上先生も帰り際に「また話したい」と言って下さりました。今回の作家訪問はとても有意義だったと思います。私たち三年はおそらくこれが最後というのが非常に残念です。本を書いている人に直接会えてお話を聞けるというこのイベント、簡単にできることではないです。貴重です。この貴重な経験をさせてもらったことを忘れないようにしたいと思います。

（3年TMo）

◆入学当初、成高に「作家訪問」というイベントがあることを知り、ずっと心待ちにしていたので、今回の初参加が私にとってとても特別なものでした。井上真偽先生の作品はまだ読んだことがなかったため、ドラマ化もされた『探偵が早すぎる』を読ませていただきました。先にドラマのビジュアルを見ていたので、上下巻に及ぶミステリでも入りやすく、トリックから様々なキャラクターまで楽しみながら読めました。今回参加するまで、「作家」という職業の方にお会いしたことがなく、作品の語り口からついキツめのインテリのような人物を想像してしまい、緊張したのを覚えています。しかし実際にお会いすると優しくて話しやすい方で、とても興味深いお話を聞くことができました。特に印象に残っているのは、高校時代のお話です。先生の学生時代は理数系で、「誰が見ても同じで客観的な答えが出るのがいい」とおっしゃっていて、その考え方がミステリにも通じているのだなと思いました。また、「物語の推敲や伏線に時間がかかる」というお話は、文芸部員として共感できて、同じ部分もあるのだと親近感がわきました。お仕事についても、本を書く以外に文章を書いたり、アニメの脚本にたずさわったりもすると聞き、自分の知らなかった「作家」さんの姿を見ることができて面白かったです。こうして先生とのお話が盛り上がる傍ら、「こんな風に私達と変わらず生活したり話したりしている人からあんな風な物語が出てくるのか」とすごく新鮮な気持ちで、面白いなと感じていました。今回の作家訪問で、知りたかった作家さんのお仕事や、その他様々なお話を聞くことができ、とても楽しかったです。また機会があればぜひ、参加したいと思います。

（1年O）

◆私が小説を読んで考えていた井上真偽先生は、とても頭が良くて少し近寄りがたい雰囲気の方だったのですが、実際にお会いしてみると思ったよりも柔らかい感じの方でした。クトゥルフ神話TRPGをやっていると聞いた時はとても驚きました。ぜひ井上真実先生の書いたシナリオでプレイしてみたいです。1作目はあまり売れなかったと聞いた時は不思議な気持ちになりました。今は作品がドラマ化する程人気で、遠い存在のように感じていた井上真偽先生にも売れない時期があって始めから完璧な人はいないのだと改めて知ることができました。1作目は先生の人生観や長年温めてきた話を全てつぎ込んで作るものだと私は考えています。そんな思い入れの強い作品を世間に受け入れてもらえなかったら、私ならすぐに心が折れてしまっていると思います。しかし、そんな状況で自分の道を突き進んで2作目を書いた井上真偽先生を私はとても尊敬します。もし次に会えたら一緒にTRPGをやってもらいたいです。

（1年Y）

井上真偽（いのうえまぎ）氏プロフィール

東京大学卒業。神奈川県出身。『恋と禁忌の述語論理』でメフィスト賞を受賞。第二作目『その可能性はすでに考えた』が二〇一六年度本格ミステリ大賞候補。『探偵が早すぎる』が今夏、日本テレビ系で連続ドラマとして放映。

日程　平成30年8月23日（木）
午後三時～五時三十分

場所　都立成瀬高校　1階・図書室

※注：今回は作家さん側のご厚意により、本校においでいただけることになりました。

参加者　図書委員1年～3年　8名、文芸同好会生徒1名（生徒計9名）
委員会顧問2名、国語科教諭1名